

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 2 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520770

研究課題名(和文) 外国語学習における成功と失敗に対する台湾人大学生の原因帰属意識

研究課題名(英文) Attributions for success and failure among Taiwanese university EFL students

研究代表者

ゴーベル ピーター (GOBEL, Peter)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：40329925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、第二言語習得における原因帰属意識と文化の関係を明らかにすることを目標とし、特に台湾における英語学習者を対象にアンケート調査を行った。主にこれら三つの点、(1)台湾人学習者は何に原因帰属意識をもつのか、(2)台湾の外国語教育環境において、従来の帰属理論は有効か、(3)原因帰属意識に関する回答において、国内(公立・私立大学)での違いはあるかについて明らかにし、その結果を多国(日本・マレーシア・タイ)での調査と比較した。

研究成果の概要(英文)：This study initially looked at how Taiwanese university students viewed their successes and failures in language learning. Over 450 university students were asked to what they attributed their successes and failures in language learning to find out 1) their learning attributions for English, 2) whether the hypothesized attribution model was valid, and 3) how the results of the study compare with previous studies.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：attribution theory motivation EFL

### 1. 研究開始当初の背景

心理学の主流において、多くの研究者が、成功・失敗原因を学習者がどのように捉えるかを分析することによって、達成行動を理解しようとしてきた (Burke, 1978; Elig & Frieze, 1979; Weiner, 1979; Weiner, Frieze, Kukla, Reed, Rest, & Rosenbaum, 1971)。この分野の研究は、成功・失敗の原因を何に帰属させるか、また、その帰属意識がその先の成功・失敗にどのように影響するのかを特定することを目指してきた。最近のモチベーションモデルの研究では、学習者があるタスクの結果をコントロールできる能力があると思うかどうか、モチベーション、実際の行動、達成度に大きな役割を果たすことが明らかにされている (Dörnyei, 2001; Schunk, 1991)。従来、この意識はすべての文化に共通であると考えられてきたが、近年、その原因帰属意識は、文化によって、また成功したか失敗したかによって異なることが報告された (Gobel & Mori, 2007; Mori, Gobel, Thepsiri, & Pojanapunya, 2010; Gobel, Mori, Thang, Kan, & Lee, 2011)。それぞれの文化における「自己」のとらえ方の違いにより、成功の原因を自己に認めたり、外に置いたり、失敗の原因を自分のせいにしたたり、外的要因のせいにしたたりするという違いが見られるというのだ。特に日本で行われた調査では、欧米とは対照的に自己批判的な結果が得られている (Heine & Hamamura, 2007; Markus & Kitayama, 1991)。

第二言語習得においては、言いたいことが言い表せない、教員から間違いを指摘されるなど、自分の能力の不十分さに対する自己評価は避けて通れないので、多くの場合、学習者にとって語学学習は失敗、間違い、恥ずかしい思いをするなどのネガティブな体験と結びついている (Horwitz, 1988)。よって、原因帰属意識に関する研究は第二言語習得の分野に深く関連しているのである。

### 2. 研究の目的

これまでの英・米での研究では、学習者の成功・失敗の要因として、多くのものが挙げられていおり (教師の影響、家族、教室環境、個人の能力、学習に対する姿勢、学習の目的など)、これらがポジティブな「自己」を保つためのフィルターの役目を果たしていると考えられる。一方日本では、成績が悪い学習者は自信の能力の欠如、努力不足を原因と思ひ、成績のよい学習者は先生の質や教室の雰囲気その原因と認識する傾向がある (Gobel & Mori, 2007; Gobel, et. al 2010; Gobel, et. al 2013)。これは、Heine and Hamamura, 2007 and Markus and Kitayama (1991) によっても支持されており、同種の研究はマレーシア、タイなどにおいても行われた。その結果、アジア諸文化における原因帰属意識にも違いがある可能性があることがわかっている。そこで、本研究は第二言語

習得における原因帰属意識と文化の関係を明らかにすることを目標とする。そこで、本研究では台湾における英語学習者を対象に、以下の研究課題を明らかにするための調査を行った。

- (1) 台湾人学習者は何に原因帰属意識をもつのか？
- (2) 台湾の外国語教育環境において、従来の帰属理論は有効か？
- (3) 原因帰属意識に関する回答において、国単位での違いはあるか？

### 3. 研究の方法

日本の学生を対象に行ったアンケート (Gobel & Mori, 2007) を基に、台湾の研究協力者と共に、台湾の学生対象にアンケートを完成させ実施した。台湾の公立私立の4大学から450人の初年次生が参加した。アンケートは二種類準備した。一つは成功の原因帰属意識について (ASQ)、もう一つは失敗の原因帰属意識について (AFQ) である。各大学おおよそ ASQ と AFQ 同数が配布され、学習者は ASQ, AFQ のいずれが片方に回答するように求められた。集められたデータは因子分析を用いて、アンケートを構成する各要因について明らかにし、グループ内・グループ間での有意な相違点について明らかにした。

### 4. 研究成果

本研究では、これまで日本、タイ、マレーシアで行った研究を、より洗練された手法を用いて、再分析した。その結果、現行のアンケートを改善し、これまでより、外国語としての英語学習の成功・失敗に対する学生の原因帰属意識をより反映させることができるようにした。このアンケートにより、台湾の学生の実態をより正確に描き出せるようになった。

それに加えて、Canadian Journal, Asian Social Sciences に、これまでの研究結果に関する論文を発表した。これはマレーシアの都市部と地方部の原因帰属意識の差について論じたものである。具体的には都市部出身者は英語習得の成功について自己に前向きな姿勢が見られるものの、地方出身者は英語習得の失敗を自分に直接結びつける傾向があった。このデータは、台北以外の地方出身者が対象の多数を占める本研究にとって非常に有益であった。

台湾の大学で行ったアンケート調査では、450人の参加者のうち、データの揃っている418人について統計分析を行った。データは大学毎に集計・分析された。208名は成功原因帰属意識に関する12の質問に、210名は失敗原因帰属意識に関する12の質問について6段階で回答した。

12の成功・失敗原因について平均値を調整し、全体の結果を概観したところ、12の成功原因帰属意識は中間値3.5を超えており、全てが成功の原因として認識されていることがわかる。高い値を得たのは順に、よい成績

を取りたいと思う意識、教師の影響、英語学習の楽しさであった。どの大学においてもよい成績を取りたいと思う意識が最も高く評価され、教師の影響は 4.3 以上の値を得た。能力についてはかろうじて認識されていた。

成功原因帰属意識とは対照的に、12 項目の失敗原因帰属意識のうち、中間値 3.5 を超えたのはわずかに 2 項目のみであった。高い値を得たのは順に、準備、能力、努力であった。これらが内的な要因であることから、自己に批判的な姿勢がここでは見られる。

単純に平均値を比較するだけで、公立・私立の大学間での差異が明らかとなった。公立大学の学生の方が私立大学の学生より、成功の原因を能力、努力、学習スキルに認める傾向にあるのだ。ただし、失敗原因の帰属意識については顕著な違いは見られなかった。このことから、公立大学の学生の方がより学習スキルや自身の能力に自信を持っていると推測できる。

結果を概観すると、台湾での調査結果はタイ、日本、マレーシアでの調査結果と類似している。一方で異なる部分もわずかにある。これはこれまでの調査でも見られた相違である。台湾とマレーシアの大学生は日本の大学生よりも、内的要因（よい成績を取りたいと思う意識、準備、英語学習の楽しさなど）に原因帰属意識を持っている。マレーシアの調査では成績が飛び抜けて高く評価されていたが、その点も台湾が類似している。

失敗の原因帰属意識については 4ヶ国すべてで自己批判的な傾向が見られる。タイ・日本では自分の関心・努力の欠如に、マレーシア・台湾では能力の欠如に、成績の悪さの原因を認めていた。中でも日本の大学生が一番自己に厳しい批判を向けているようだ。この点については、今後のさらに詳細なる調査が求められる。

本研究を遂行するうちに、いくつかこれに関連する明らかにすべき点が生じ、それについての研究を実施・発表した。一つは所属教育機関の文化学部で導入した Moodle を使用した多読・多聴プログラムに対する学生の姿勢と取り組みについてである。所属学部における初年次必修英語科目内で一年を通して行った RWL（聞きながら読む）学習プログラムの実施計画からその有効性を検証した。本プログラムを支える理論や実践、学生の学習記録の保存・管理に役立つ MoodleReader の機能を紹介し、運営上の問題点についても検討し、プログラムの有効性を検証した結果、RWL 学習量はリーディング・スピードや語彙認識の向上に寄与することを明らかにした。このプログラム終了時に行ったアンケートでは日本人の原因帰属意識について、これまでの研究成果を改めて支持する結果となった。

もう一つの課題は学生と教員のデジタル機器の使用とそれらに対する姿勢についてである。アジアにおける成功原因帰属意識は

教員にあるとの調査結果があるので、それがより個人ベースでならされることが多い ICT を利用した学習にどのような影響を与えるか調査する必要があると考えた。さらには、そもそも学生は ICT の利用についてどのような意識を持っているのか、また教員が教育現場でどのように ICT を利用し、また学生にそれらを使う機会を与えているのかという疑問にたどり着いたのだ。

そこで、現大学生とデジタル機器との関わり方について、所属大学の学生を対象に調査を行った。377 名の大学生にアンケートを実施した結果、デジタル機器やテクノロジーは学生が使える状態にあるものの、学生が実際に使用するデジタル機器の種類や方法は非常に限られたものであるということが判明した。同時に、大学生が望ましいと考える学習スタイルを調査した結果、大学生は同様従来型の教室内での紙ベースの学習スタイルを好むことが明らかとなった。また、教員を対象に教育・研究の場面でのパソコン使用の実態調査アンケートを行い、日本の大学教員の ICT 使用の範囲や、使用に影響する要因を検証した。教員の教室内外での ICT の使用、コンピュータ・スキルについての自己評価、使用するソフトウェア、ウェブサイトなどを問うたアンケートの結果、大学教員による ICT 利用やスキルの自己評価は我々が想定していた以上であることが明らかとなった。教員が望ましいと考える教育スタイルを調査した結果、教員好む教育スタイルは大学生が望む学習スタイルと一致していることが明らかとなった。

日本におけるコンピュータや ICT 機器へのなじみのなさが、学生の学習スタイルや成功・失敗の原因帰属意識に関連している可能性があると考えられる。日本の大学生にはコンピュータに対する「苦手意識」が植え付けられており、それが原因帰属意識に反映されているように思われるからだ。一方、マレーシアやおそらく台湾では ICT 機器の使用や認知度にポジティブな姿勢が見られ、それが原因帰属意識にも反映されているものと思われる。

これらの研究の成果は GioCALL 2012(北京)、EdMedia 2012(デンバー)、ICALL、MCUIC(台湾)で口頭発表した。コンピュータやデジタル機器の教室内外での使用はますます増加しており、これらの二つの研究は、本研究の分析に非常に役立つ結果をもたらした。本研究ではまとまった量の貴重なデータが確保できたので、今後もこれらを利用してさらに詳細な分析を進めていきたい。因子分析によって要素を絞り込み、要因を内的・不安定・制御可能の三つに分類すれば、それぞれの傾向が明らかになる。主成分分析により 12 の成功原因項目の次元効果を分析し、それを使用して MANOVA で大学間の有意な差を見つけることができるであろう。また、これらの結果を、これまでの他国での研究と比較し、

文化間での差異を見いだすこともできる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 18件)

1. Gobel, P. & Kano, M. (2014). Japanese teachers' use of technology at the university level. Attitudes to technology in ESL/EFL pedagogy. *Arabia TESOL Publications*, 査読なし, xx-xx.
2. Gobel, P. & Kano, M. (2014). Mobile natives: Japanese university students' use of digital technology. *APACALL Book III*. 査読あり, Cambridge Scholars Publishing. Xx-xx.
3. 加野まきみ, & ゴーベル・ピーター (2014). 「京都産業大学における教員の ICT 利用実態—アンケート調査と結果分析—」*高等教育フォーラム*, 査読あり, Vol. 4, 53-65.
4. Gobel, P. & Kano, M. (2013). Implementing a Year-long Reading While Listening Program for Japanese University EFL Students. paper presented at the 15th International CALL Research Conference at Providence University, Taichung, Taiwan. *Computer Assisted Language Learning*, 査読あり, XX, X, 1-15. DOI: 10.1080/09588221.2013.864314
5. Gobel, P. & Kano, M. (2013). Student and Teacher Use of Technology at the University Level. In *Proceedings of Cognition and Exploratory Learning in the Digital Age (CELDA 2013)*, 査読なし, 17-23.
6. 加野まきみ, ゴーベル・ピーター (2013). 「モバイルネイティブ: 京都産業大学における学生の ICT 利用実態」*京都産業大学総合学術研究所所報*, 査読あり, 第 8 巻, 1-19.
7. Gobel, P. (2013). Capturing experience and creating community through digital storytelling. *OnTask*, 査読なし, 3,1,4-12.
8. Gobel, P., Thang, S. M., Sidhu, G. K., Oon, S. I., Chan, Y. K. (2013). Attributions to success and failure in English language learning: A comparative study of urban and rural undergraduates in Malaysia. *Asian Social Science*, 査読あり, 9, 2, 53-62.
9. Thang, S. M., & Gobel, P. (2012). Special Issue: Selected Glocall 2010 Conference Papers: Specific Applications of Technology in Second/Foreign Language Educational Settings. *Computer Assisted Language Learning*, 査読なし, 25,3, 213-293.
10. Gobel, P. & Kano, M. (2012). The Implementation of a Reading while Listening Program for Japanese EFL Students. In T. Amiel & B. Wilson (Eds.), *Proceedings of World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications 2012*, 査読なし, (pp. 2256-2261). Chesapeake, VA: AACE.
11. Gobel, P. & Kano, M. (2012). Implementing a Year-long Reading While Listening Program for Japanese University EFL Students. In *Proceedings of the Fifteenth International CALL Conference*, 査読あり, (pp. 247-252).
12. Kano, M. & Gobel, P. (2012). Implementing a Year-long Reading While Listening Program for First-Year University English Students at Kyoto Sangyo University. *Sogo Educational Research Bulletin*, 査読あり, 7, 1-11.
13. Hubert, R. P. & Gobel, P. (2012). Integrating a Supplemental Vocabulary Instruction Program into an EFL Curriculum. *Forum of Higher Education Research*, 査読あり, 1/2. 35-42.
14. Gobel, P. (2011). Attributions to Success and Failure in English Language Learning: A Comparative Study of Urban and Rural Students in Malaysia. *Sangio Kyotiensis, Foreign Languages and Literature Series*, 査読あり, No. 44. 66-85.
15. Gobel, P. (2011). The Effect of Reading While Listening on TOEFL Gains. *Forum of Higher Education Research*, 査読あり, 1/1. 44-51.
16. Gobel, P., Mori, S., Thang, S., Kan, N., & Lee, K. (2011). The impact of culture on student attributions for performance: A comparative study of three groups of EFL/ESL learners. *JIRSEA Journal*, 査読あり, 9/1. 27-43.

17. Thang, S., Gobel, P., Nor, F., & Vijaya, L. (2011). Students' attributions for success and failure in the learning of English as a second language: A comparison of undergraduates from six public universities in Malaysia. *Pertanika*, 査読有, 19/2. 459-474.
18. Gobel, P. & Kano, M. (2011). Implementing a Large-scale Reading While Listening Program for University EFL Students. In *Proceedings of World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, and Higher Education 2011*, 査読なし, (pp. 1224-1229). Chesapeake, VA: AACE.

[学会発表](計 10件)

1. Gobel, P. & Kano, M. *Student attitudes towards computer-mediated extensive reading/listening homework using the Moodle CMS*. GloCALL, DaNang, Vietnam, November 28-30, 2013.
2. Gobel, P. & Kano, M. *Student and Teacher Use of Technology at the University Level*. CELDA, Fort Worth Texas, USA, October 22-24, 2013.
3. Gobel, P. & Kano, M. *Student and Teacher Use of Technology at the University Level*. Ming Chuan University 2013 International Conference on TEFL and Applied Linguistics, Taipei, Taiwan, March 8-9, 2013.
4. Gobel, P. *The Computer as Ball and Chain: Mobile Natives and the Digital Self*. Plenary given at GloCALL 2012, Beijing China, October 18-21, 2012.
5. Gobel, P. *Digital Storytelling Tools for Educators*. Workshop given at GloCALL 2012, Beijing China, October 18-21, 2012.
6. Gobel, P. & Kano, M. *Teachers' Use of Technology at the University Level*. GloCALL 2012, Beijing China, October 18-21, 2012.
7. Gobel, P. & Kano, M. *The Implementation of a Reading while Listening Program for Japanese EFL Students*. EdMedia 2012: World Conference on Educational Media and Technology, Denver, Colorado, USA, June 26-29, 2012.
8. Gobel, P. & Kano, M. *Implementing a Year-long Reading While*

*Listening Program for Japanese University EFL Students*. The Fifteenth International CALL Conference, Taichung, Taiwan, May 24-27, 2012.

9. Gobel, P. & Mori, S. *The impact of culture on student attributions for performance: A comparative study of three groups of EFL/ESL learners*. Presentation at South East Asian Association for Institutional Research (SEAAIR) 2011, Chiang Mai, Thailand, November 2-4, 2011.
10. Gobel, P. & Kano, M. *Digital Natives or Mobile Natives?* Presentation at GloCALL, 2011. Manila, Phillipines, October 28-29, 2011.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ゴーベル・ピーター (GOBEL, Peter)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号: 40329925